

# 日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chugoku Gakkai

二〇二〇年（令和二年）四月三〇日  
第一號（通卷第三十七號）



八大山人「安晚帖」竹石図（泉屋博古館蔵）

## ◆目録

- 卷頭言
- 二 環境文学、災害文学  
金 文京
  - 四 「世説学」国際学会参加記  
大平 幸代
  - 六 「中国宋代文学学会」参加報告  
加納留美子
  - 八 郁達夫八高卒業百周年シンポジウム  
大久保洋子
  - 一〇 国内学会消息（平成31年・令和元年）
  - 二一 委員会報告  
論文審査委員会
  - 二二 日本中国学会評議員選挙投票のお願い
  - 二三 事務局より
  - 二四 第72回大会開催のお知らせと研究発表の募集

編集●出版委員会 静永 健  
〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学文学部  
メールアドレス：shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp  
発行●日本中國學會  
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内  
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org  
日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

# 環境文学、災害文学

金 理事  
文 京 長

前回は台風による大会中止後の措置報告が大半を占めてしまったので、今度こそなにか楽しい話題を、と思っていた矢先のコロナウイルス流行である。「禍不单行」とはよく言ったものだ。昨年あたりから

地球環境がこれまでとは違う、何か新しい次元に入ってしまったような感想をもつ人は多いと思う。そのためであろう、近年、環境文学、災害文学に対する関心が高まっている。われわれの学界でも、環境や天変地異をテーマとした著書、論文を目にすることが多くなった。言うまでもないが、将来の地球環境を左右する鍵の一つは中国が握っている。今後この分野は大いに研究されるべきであろう。それはもはや単なる研究課題を超えた切実な問題であり、とかく現実から遊離しがちなわれわれの研究を、実社会と結びつけるためにも役立つはずである。

中国での状況はよく知らないが、数年前、ちょうどPM2.5が猖獗を極めていた頃、北京の知人から両靖室主人戯編『新編醒世小説平霾傳』なる白話小説がメールで送られてきた。読んでみると、PM2.5を擬人化した霧霾君を主人公とする諷刺小説である。あらすじは以下のとおり。

第一回「霧霾君南遊尋歡、吳越王張榜求賢」—燕趙に住まう霧霾君、気の向くまま江南に遊ぶや、吳越の人みな恐慌を來たし、「送霾文」を作り歐米、東瀛への遠遊を勧め、霧霾君これに従うも数日にして歸りて曰く、「吾幼きより灰塵、尾氣（排氣ガス）を食うを好む、然るに彼の地は環境良好にて食う物なし、久しく居れば餓死せん」と。よりにて上海に家を購い妾を困い定住せんとす。吳越王これを聞き大いに憂え、重賞を出して広く対策を求む。

第二回「秀士上策遭斥罪、霾君發怒攪江湖」—そこへ英国歸りの白衣の秀士現れ、王に申すには、「彼の霾賊、父は英人、母は扶桑の女にて、数十年前、父母は環境を汚染せる罪により兩國にて斬罪に処せられ、一人難を燕趙に逃れる。吾に平霾十策あり」とて、一に經濟發展の緩和、二に汚染源の工場閉鎖、三に公共交通の普及など滔滔と述べるも、王は最後までは聞かず、「そちの策はみな迂遠じゃ」と、これを退く。そこへ王の寵愛せる内侍、小公公進み出で、「奴才に良策」ありと。さてその策や如何に。

第三回「公公妙計奏奇効、霾君返京恨難平」—小公公申すには、「霾賊の忌む所はただ風のみ。北地にても大風吹く時は霾害止むと聞く。今巨型の風輪を作り、城中高処に置き風を起せば、霾賊自ずと去らん」と。王膝を打ちて早速風輪十六具を作り、高樓の頂に設けて風を起す。霾君たまらず、わずかに愛妾藹藹のみを連れ北京に逃げ歸り、吳越王を恨むことしきり。さて霾君捲土重来成るや否や。

第四回「吳越王因功被黜、大統領與霾媾和」—霾君一度去りて、江南の地は万里晴空、九州大統領これを聞き大いにその功を賞め、吳越王を平霾總督に任じ、風輪を全国に設置せしむ。然るに風輪余りに多きが故、東西南北の風互いに相殺し、却って風なし。かつ先に吳越王の風輪に吹かれし霧霾、海を越え近隣に瀰漫し歐米に及び、各国より非難の声嗷嗷とあがる。大統領やむなく吳越王を罷免し釣魚島に流罪とし、嶺南王に命じて霾君と講和せしむ。さて講和の内容や如何に。

第五回「劃區輪替享太平、人霾共處永和諧」—嶺南王は講和条件に東北王を提案するも、東北は灰塵、尾氣少

なしとて靈君これを拒否、逆に北京、上海、広州三城の一を求め、会談は決裂。そこへ礼部侍郎策を献じて曰く、「北京を除く全国を二十四区に分け、靈妖をして一区に半月づつ巡歴せしめ、靈妖来臨する時は該区の住民に休暇をあたえ、外地に遊覧せしむれば、靈妖を管下に置くを得、民は靈害を免れ、かつは全国一斉休暇の混乱を解消すべし、これ一箭三雕の万全策なり」と。靈君これを肯い終に講和なり、一件落着。

以上、今日の状況にも一脈通じる諷刺のきいた佳構で、随所に警句妙語あり、全文を紹介できないのは残念である。その後、作者の求めに応じて、私も次のような戯文を草した。今回は特に書くこともないので、この駄文を転載して責めを塞ぐことにしたい。今号の「便り」が会員諸氏に届くころ、不幸にして外出自粛のお達しがまだ続いているかもしれない、その時の暫し無聊を慰める一助にもなれば幸いである。

冬日朔風凜冽、六花飄揚、砌成銀白世界。余邀二三好友、正欲賞雪淺酌低唱、忽而天上飛來電信、視則兩靖室主人所撰『新編醒世小説平靈傳』也。余見其回目、已然不悅、云：「清平天下、豈有靈妖作祟之理。敗吾酒興、可置之不理。」一友乃云：「兄言差矣。當今環球統合之世、鄰國有難、宜當同舟共濟。且聞此妖之母原為扶桑吾邦之人、然則吾人似亦有責。何況此妖素懷殺母之恨、覬覦吾邦。北風一吹、即欲飄洋過海、侵我境界、虐我良民、不可視為隔岸之火、袖手旁觀。」余聞之、乃起而謝云：「吾兄讜言、誠為菩薩心腸。弟一時不敏、失察大局。」於是與諸友同閱其文、讀至一半、不禁拍案大叫：「奇歟怪哉、不意靈妖之害一至於此。」讀畢掩卷大歎：「作者憂世苦心、正中時弊。醒世兩字、當之無愧矣。昔者明人有『平妖傳』之作、雖為人間妖異、不過左道邪術、何足慮哉。近代李宗吾先生著有『厚黑學』、痛罵國人臉厚如城牆、心黑似煤炭。實為悲天愍人、憂國醒世之作也。然人臉之厚、人心之黑、猶可離群索居、獨善其身；亦可隱淪市朝、心遠地偏、衆臉皆厚我獨廉、衆心皆黑我獨清。今此靈妖則不然、漫天蔽地、無孔不入。索居既無用、心雖遠而地卻不偏、無可逃避矣。」友云：「作者醒世苦心、良可感也。然其平靈之策、稍嫌迂闊荒唐。秀士十策、實為

腐儒陳言、不達時務、遠水不能救近火、固不足取也；小公公風輪之策、妙則妙矣。然天下之大、霧霾充斥其中、風輪雖鉅、豈可掃盡。此輩韋小寶之流、所為幾近兒戲、不可置信。至於嶺南王議和、此乃招納土匪之老套、人靈共處、絕非拔草除根之策。是為美中不足之處也。」余云：「不然、吾兄所見、有所不逮。酒翁之意不在酒、吾謂作者之意恐不在於平靈之策也。」諸友聞之、不禁驚愕、異口同聲云：「此言何出？此篇題為平靈、豈可別有寓意？」余答云：「弟有心得、姑妄言之。諸兄亦姑妄聽之可也。靈妖英父日母、早被兩國處斬。英日法治之國、刑事程序極為繁瑣、尚能及時處置。而堂堂中華、素稱人治。子不云乎：“必也無訟。”主席亦曰：“無髮無天。”槍斃重犯、猶可速決、朝不待夕。何況區區靈妖、何足道哉。然而遲遲至今、猶豫未定、大費周章、是何故耶？余謂自從鴉戰以來、神州陸沉、一蹶不振、荏苒陵夷、以至當代。而近者鄧君南巡、一番講話、能回狂瀾於既倒。之後蒸蒸日上、今已猛追美洲大國、將成世界甲富矣。然凡事有利則必有弊。財富之突飛猛進、倘無制度之改新整備、則反而弊端百出。車須兩輪始行、孤掌難鳴、乃事之常情也。彼秀士腐儒、公公人妖、藩王守舊、無非封建遺醜、所獻平靈之策、無怪乎於事無補。而身居京師統轄彼衆者、竟稱九州大統領。此大統領三字可圈可點、竊以為全篇之關鍵。所謂大統領者歐語普利自定之譯也。普利自定者民選君主之謂。日人不用雅言、翻為俗語、而日本自無稱大統領者。華人則曾譯為總統。總統之名雅則雅矣、唯不免令人聯想希特勒之獨裁、袁世凱之僭帝、反不如大統領之俗而平實。作者今言九州大統領、而神州何嘗有大統領耶？此豈非作者深意所在、秀士、公公輩之庸劣、得以反襯此意。是耶非耶、吾不敢言。」諸友聞之、拍手稱善、皆云：「吾兄慧眼、透徹紙背、非愚弟輩所能企及。」一席談論、不覺日已向西、銀白世界轉成黑暗世界。諸友紛紛辭別、余亦無投轄之興、任其歸去。殘羹冷酒、自酌自飲、不意大醉、昏昏欲睡。忽而兩靖室主人排門直入、怒目相視而言：「吾作本無此意、爾一孔之見、却擅自解釋、危言聳聽、譁衆取寵、居心何在？」余慌忙不知所措、冷汗浹背之際、撒然驚覺、原來是南柯一夢。環視四周、一人兀坐於斗室之中、窗外天陰地暗、霧風徐徐而起、莫非靈妖亦欲侵我室耶？乃急為關門、蒙頭大睡、旋入黑甜之鄉、已不知身在何處矣。

# 「世説学」国際学会参加記

奈良女子大学  
大平 幸代

「世説学」国際学術研討会」は、今回が2度目の開催である。『世説新語』でなく、「世説学」を掲げるのは、『世説』が文史哲にわたる広汎な学問領域に深くかかわる書物であること、後世にも『世説』に仿う書物が編まれるなど大きな影響を持ち続けたことによる。『世説学』を提唱する劉強『世説学引論』（上海古籍出版社、2012）は、その内容を文献学、文体学、美学、接受学、文化学、語言学の6分野に大別する。「文選学」ほどメジャーではないが、さまざまな方向に発展する可能性を秘めた「学」問領域だといえよう。初回のシンポジウムは、2017年11月に河南師範大学にて行われた。その際の発表論文の約半数は、劉強・李永賢主編『神超形越——首届“世説学”国際学術研討会文集』（鳳凰出版社、2018）に収載されている。

さて、今回の「世説学」のテーマは、「魏晉風流与中国文化」。2019年8月22～23日、南京大学仙林校区にて行われた。仙林は、広大で先進的な大学城（学研都市）だが、実は歴史も古い。秦代にはすでに江乘県が置かれ、東晉の時には南琅邪郡もこの辺りに立てられた。『世説新語』（言

語二／55）によれば、北伐にあたってこの地（金城）に立ち寄った東晉の桓温は、むかし琅邪内史だった時に自ら植えた柳の木が十圍もの大きさになっているのを目にし、「木すら猶お此の如し、人 何を以て堪えんや」といって、はらはらと涙を流したという。——結局、中原回復も王権奪取もかなわなかった桓温。『世説』には、失われた魏晉名士文化への憧れと幻想がつまっている。一冊の書物を超えて、一つの世界文化を形成しているといつてよい。その「聖地」で『世説』のこぼれに思いを馳せる、これもまた一興ではないか。

22日午前には、開幕式に引き続き、4名の基調講演が行われた。銭南秀（ライス大学）「在漢文化圈尋覓“賢媛”精神」は、中国女性史叙述には「列女」と「賢媛」の二大系統があること、両者の消長および補完関係によって女性史が織りなされていることを述べ、さらに日本・韓国・ベトナムの「列女」「賢媛」の系統と変容を論じる。張蓓蓓（台湾大学）「也談《世説》的早期接受」は、劉孝標注、『高僧伝』、唐修『晋書』、『史通』における『世説』受容のさまを丹念に分析する。寧稼雨（南開大学）「從《世説新語》看魏晉名士飲酒文化的內涵嬗變」は、魏晉における飲酒の個人化、精神化を指摘し、それが後世の中国飲酒文化の方向を規定したという。張伯偉（南京大學）「日本“《世説》学”総案」は、江戸時代の「世説熱」のはじまりが荻生徂徠に先んじて、林家の学にあるとし、江戸「世説学」の特色を唐話学、歴史学、文章学の面から論じる。

次いで、張伯偉編著『日本世説新語注釈集成』（鳳凰出版社、2019）の出版を記念して座談会が開催された。本書は、江戸時代の『世説』（王世貞『世説新語補』）校注評釈26種に加え、日本人による漢文の「世説体」著作8種を影印し、その一々に解題を加えたもので、全15冊にのぼる。張氏とその門下の20年にわたる蒐集の成果である。『世説』の評注については、周興陸編著『世説新語彙校彙注彙評』（鳳凰出版社、2017）のように、古今の資料を博搜した労作がすでに出版されているが、本著による日本の世説注釈書の網羅的紹介が、東アジア世説学の進展に裨益するところは大きい。なお、この座談会の概要は、『古典文学知識』2019-6（総207）（鳳凰出版社）に、劉智禹整理「学術新



材料与研究新進境——《日本世説新語注釈集成》新書分  
享会発言紀要」として掲載された。

22日午後と23日午前は、二つの分科会で研究発表が行わ  
れた。「世説学」の現状をご覧いただくために、あえて全  
発表のタイトルを列挙する（当日欠席者分は省略）。

### 【第一組】

第一場：龔斌「《世説新語》跋文三篇」／許東海「人物品  
鑑与賦学流变：《世説》司馬相如論述在漢魏六朝  
“辞宗”賦学系譜的位置」／劉強「楊勇《世説  
新語校箋》平議」／張富春「論文通内聖外王与  
重玄思想之意義」／金貞淑「謝道韞与十七世紀  
朝鮮社会的家門意識」

第二場：稲畑耕一郎「《世説》時代“早慧”与“天真”の  
価値観」／胡秋雷「《世説新語》中的文化記憶与  
身份認同」／王京州「走向与超越類書：論《世  
説新語》的類書性及其影響」／陸帥「石崇“汰  
侈”考—從《世説新語》到《晋書》」／白朝暉  
「從《世説新語》与同題材史料的差異表述看其價  
值指向」

第三場：下東波「諷寓闡釈与異域解讀—江戸時代《古詩  
十九首》日本注本考論」／齊慧源「《紅樓夢》文  
体創作与《世説新語》」／于溯「中朝往事：兩晋  
官私書写中的建国史」／宋展雲「《世説新語・傷  
逝》与唐前文学生命主題演進」

第四場：俞士玲「明代作為素材的《世説新語》：以李贄  
《初譚集》為中心」／樊榮「佛学与東晋文化心理  
疏離中的融合—以《世説新語》為中心」／劉雅  
萌「從“聖人有情”到“聖人無我”—論魏晋玄学  
中的“聖人之情”」／王楚「酒德辯—以《世説  
新語》論漢、晋時的飲酒与道德」

### 【第二組】

第一場：吳冠宏「“玄解”《世説》—以“桓公入峽”“孫、  
褚論南北之学”為例」／周興陸「程炎震及其《世  
説新語》校証」／魏義霞「郭象思想与魏晋風度」  
／王允亮「韶音令辞：《世説》清談音辞芸術發展  
探析」／姚樂「王羲之早期經歷考補—以《世説  
新語》及劉孝標注為線索」／王秀娟「《世説新

語》中魏晋士人的矛盾心態—風尚、明教与荒誕」

第二場：朱曉海「積六朝之“風流”」／大平幸代「“豫章  
太守陳蕃”的德行—《世説新語》与地方官吏文  
化」／李劍鋒「魏晋別伝与《世説新語》的創作」  
／朱萍「与《世説》《語林》略相類—汪琬《説  
鈴》与清初士林」／赫兆豐「知識下移与六朝才  
女書写標準的演变」

第三場：程章燦「從《世説新語》及其劉孝標注看魏晋南  
北朝書籍史」／權家玉「從家族名士群看漢晋士  
林的嬗变」／沈柯寒「“渡江”：探析《世説新  
語》叙述的個人渡江經驗」／羅鷺「關於汪藻《世  
説叙録》的幾個問題」／楊穎「行走中的魏晋風  
度」

第四場：王建国「論中古“語”体之演变及其文体特徵—  
以《語林》《世説新語》為中心」／金程宇「日藏  
古鈔本《世説新書》鑑藏者略考」／鄭虹霓「兩  
宋詞人对“魏晋風度”的選択性接受」／曾敬宗  
「《世説新語》教学通識化芻議」／丁玉柱「《世説  
新語》義理之道研究」

上記の通り、「世説学」の門戸は、分野的にも、地理的  
にも、時代的にも広い。今回のシンポジウムには、中国・  
台湾・日本・韓国・マレーシア・アメリカの各地より、『世  
説』研究の大家から博士生まで多くの研究者が集った。発  
表時間に限りはあったが、時に激しい議論が戦わされ、若  
手の活躍も目立った。22日の懇親会には美酒も供され、酒  
と清談の（菓は除く）『世説』的世界が堪能された。

23日午後には、旧総統府に隣接する「六朝博物館」を参  
観した。館長で南京大学歴史学院教授でもある胡阿祥氏の  
解説付きである。開放的なホールのある斬新な建築、豊富  
な出土品、遊び心のある展示方法等々、魏晋の風流はここ  
にも形を変えて継承されている。

なお、今回のシンポジウムの論文集は、主催者である南  
京大学の程章燦教授によって編纂が進行中である。次回の  
シンポジウムは本来、2年後のはずであったが、『世説』好  
きには待ちきれないと、2020年に洛陽、2021年に台湾（花  
蓮）での開催が計画されている。

# 「中国宋代文学学会」参加報告

加納留美子

相模女子大学講師



王水照先生と

2019年10月18日から21日まで、上海の復旦大学にて「中国宋代文学学会第十一届年会暨宋代文学国際学術研討会」が開催された。本学会は、2000年の創立以来、中国各地の大学と共催する形でおよそ二年

に一度開かれる。復旦大学でその第一回大会が開かれ、今回約二十年ぶりに二度目の開催を迎えた。日本からは、浅見洋二（大阪大学）・東英寿（九州大学）・三野豊浩（愛知大学）・原田愛（金沢大学）各氏と筆者の五名が参加した（坂井多穂子氏〔東洋大学〕は論文のみの参加）。会議は19日の午前から21日の午前まで開かれ、その内19日と21日の午前に開幕・閉幕式を含む全体会議が、他の時間は五つの会場で分組討論が行われた。

復旦大学を象徴するツインタワー、光華楼の報告庁で行われた開幕式は、立ち見が出るほどの盛況だった。長年宋代文学研究の発展と後進育成に尽力されてきた中国宋代文学学会名誉会長の復旦大学王水照氏、現会長の南京大学莫砺鋒氏を始め数名の方々が挨拶や祝辞を述べられ、続いて関連学会を代表する重鎮による大会発言に移った。中国唐代文学学会会長の陳尚君氏（復旦大学）に

よる「司馬光『資治通鑑』史論」、中国詞学研究会会長の王兆鵬氏（中南民族大学）による「唐宋文学編年地図的学術理念与学術意義」、日本宋代文学学会会長の浅見洋二氏による「罪与田園：蘇軾、陸游詩文札記」を始め、計六名が最新の成果を発表された。

今回、大会・分会を合わせて160余篇の論文が集まった。筆者が以前参加した2009年（於成都）と2015年（於杭州）の二回に比べて参加者がはるかに多く、論文内容も多岐に亘っていた。しかし今大会の記憶は、過去二回の大会以上に鮮明かつ具体的に残った。恐らくそれは、今回の分科会で打ち出された主催者の新機軸が奏功したためだろう。

分科会は二日間にわたって六つの時間枠が設定され、それぞれの枠では下記のようなテーマが掲げられ、それぞれ五名が発表した。

- 第一組＝詞（詞調与詞体／詞本事与詞伝播／詞集与詞芸……）
- 第二組＝詩総論（宋詩伝播与接受／江湖詩人与南宋詩壇／樂府創作与詩学観念……）
- 第三組＝詩各論（蘇詩專題／歐陽脩專題／曾鞏專題……）
- 第四組＝文化（宋人生活与審美文化／仏教与宋代文学／宋代書籍編纂專題……）
- 第五組＝文その他（地域景觀与文学書写／史伝筆記譜録專題／宋代墓誌專題……）

上記の「詞」や「詩総論」などは筆者の便宜的な概括だが、括弧内は主催者が各時間枠に冠したテーマである。列挙した例は一部に過ぎないが、文体やテーマに応じて系統的に分類されていることがよく分かる。実質的運営を一手に担った復旦大学副教授の侯体健氏によれば、これらの分類は、事前に提出された論文内容を踏まえて侯氏自らが調整したものだという。参加者にとっては、同時進行する複数の会場から関心ある会場を選ぶ助けとなり、後で五冊に及ぶ厚い論文集のなかから目的の論文を探す際にも役立った。以前参加した大会では、各会場は文章・詩学・詞学・総合と文体別に大まかな区分がされるだけで、同一時間枠の発表でも相互の関連性は乏しかった。多数の参加者がいればこそ実現できた分類だろうが、今後もこの形式を継続してほしく思う。

運営側が苦心した調整を、分科会は時間厳守という形で支えた。例えば第三組では、所定の時間になった途端に司会者が発表を中断させるという場面が度々あった。日本の学会ではなかなか見られない思い切りのよさである。また発表者が欠席の場合は、総合討論の時間を延長させ、他会場との進行とズレが生じないように調整していた。各時間枠には二名の司会者が配され、司会者は各自二、三本の論評を担当した。その結果、特定の論文だけに議論が集中するという偏りは見られなかった。

今大会では蘇軾に関わる発表が目立ち、特に第三組では、筆者を含め二十篇もの関連発表がなされた。例えば〈蘇詩專題〉の時間枠では特定の時代や主題、あるいは文体に関する考察が、〈蘇軾の東亜接受〉においては日本や朝鮮における受容に関する考察が、また〈東坡文化与思想〉においては画像や出版印刷などに関する考察がなされた。発表数の多さにもかかわらず、主題や内容が重複することはほとんどなく、近年の蘇軾研究の裾野の拡がりに改めて驚嘆し、自身とは異なる着眼点の一つ一つに刺激を受けた。

発表内容だけでなく、筆者とそう変わらない若い世代の研究者が多く参加していた点でも印象的である。第三組はその傾向が顕著で、前段に挙げた蘇軾関連の発表の大半が三、四十代の研究者によるもので、中にはポスドクや博士課程の院生による発表もあった。主催者が若い研究者の参加を歓迎したとのことで、本学会の後進へ寄せる期待の高さを感じられた。近年中国では、若い宋代文学研究者が定期的に会合を開き（中国中青年学者宋代文学同人研修会）、立場を越えて活発な議論をし、研鑽を積んでいると聞く。かつての中国では、全国規模の学会において、院生をはじめとする若手研究者が発言の機会を得ることは稀だった。しかし、世代を超えて宋代文学研究を盛り立てようとする昨今の気風が、今大会にも大きな影響を与えたのだと思われる。

こうした気風が最もよく表れた場が、「80後学人宋詩研究專題」だった。初日の全体会議では大家が発表し、対する最終日の全体会議では若手研究者五人の発表が並んだ。日本からは原田愛氏が「烏台詩案」前後の蘇軾を

発表し、侯体健氏の「幻象与真我：宋代覽鏡詩与詩人自我形象的塑造」が大会の掉尾を飾った。80後である筆者もこの場での発表を打診されたのだが、折悪しく当日早朝の便で帰国しなければならなかった。最終日の会場の熱気を共有できなかったことが返す返す悔やまれる。

久々に国外の学会に参加したため、筆者は当初かなりの不安と緊張を感じていた。不安の余り、前泊したホテルから老西門の文廟に出かけ、発表の無事を祈願したほどである。しかし会場に到着すると不安は消え、心中穏やかに過ごすことができた。緊張が解けたのは、復旦大学が筆者のかつて留学した大学であり（09～11年留学）、そこに身を置く中で様々な記憶が思い出されたためだった。かつて授業を受けた教室で、今回研究者として発表できたことは、ことに感慨深かった。当時指導を仰いだ王水照教授に近況を報告することが叶い、その研究室で同門の師兄たちとともに談話を楽しんだ。また一緒に授業を受けた学友とも再会し、大学で教員となった者同士、授業や試験、学生の様子を話題に会話が弾んだ。

加えて、日本国内で海外の研究者と交流する機会を定期的に得ていたことも幸いした。筆者はこの十年余、早稲田大学の内山精也氏が主催する江湖派読書会に参加しているが、この会には国内外の研究者が参加し、日本語と中国語を交えた議論が活発に行われている。また、毎年五月には日本宋代文学学会の大会が開催され、こちらにも海外の研究者が多数参加している。こうした機会に知遇を得た研究者が少なからず今回の学会に参加しており、彼らの存在が筆者の緊張を大いに和らげてくれた。

宋代文学研究の領域は、国外の研究者との交流がとりわけ緊密に保たれている。そうした密なる連携は、日本の宋代文学研究をリードする年長の先輩方——今回参加された浅見洋二氏や東英寿氏、あるいは今回参加されなかった内山精也氏たちが中心となり、営々と築きあげてきたものである。今後も日本の研究者が、今や学会の中心となりつつある中国の若手研究者と向き合い、持続的に交流していくためには、若い世代の一層の努力が不可欠となるだろう。そういった感想と些かの達成感を携え、帰国の途に就いた。

# 郁達夫八高卒業 百周年シンポジウム

大久保洋子

早稲田大学非常勤講師

## (一) 本シンポジウムにみる郁達夫と名古屋の関わり

2019年8月3～4日、郁達夫旧制八高卒業百周年記念国際シンポジウム「郁達夫研究の現状と展望：その文学と人生」が名古屋大学（名大）に

て開催された。周知の通り、中国近代の作家郁達夫(1896～1945)は1913年から約九年間、日本に留学し、名大の前身である旧制第八高等学校（八高）で1915年から四年間を過ごした。留学中に発表した短編小説「沈淪」には、八高時代の経験が反映されているといわれる。名大ではこれまでも郁に関するイベントが開催されてきた。今回の国際シンポは、四年前に郁入学百周年記念イベントを企画・主催された高文軍氏（桜花学園大学）が発案し、名大の星野幸代氏の協力を得て実現したものである。

郁は八高時代、愛知県海西郡弥富村（現・弥富市）の漢詩人、服部担風（1867～1964）と親しく交際し、その漢詩の会では詩才を高く評価されていた。郁の名は現在も地元紙で取り上げられ、地元で彼を知る人はアカデミックな分野にとどまらない。こうした状況に鑑み、今回のシンポは学術性を重視するだけでなく、一般の来場

者も想定し、地域との関連性を視野に入れたプログラムとなった。会場の外では関連資料が展示され、地元紙を中心に、郁に関する新聞記事や逸話が紹介された。

参加者名簿によると、当日の来場者は84名、事務関係者を含めると計110名超であった。一般来場者は約30名で、一作家のシンポジウムとしては大きな成功をおさめたといえよう。会場となった名大文系総合館7階カンファレンスホールは終日、熱気に包まれていた。

## (二) 基調講演と報告

初日の基調講演は陳子善（華東師範大学）、許子東（香港嶺南大学）、高遠東（北京大学）、大東和重（関西学院大学）の4氏で、いずれも中国現代文学研究史に残る画期的な成果を挙げた郁研究の第一人者である。これらの名だたる顔ぶれが一堂に会したことは、本シンポの第一の功績といえる。司会・コメンテーターは陳朝輝（清華大学）、工藤貴正（愛知県立大学）、星野幸代、大東和重の諸氏が務められた。中国側参加者の講演には日本語の通訳が付き、日本側参加者は日中両言語で講演・報告を行った。

齋藤文俊・名大大学院人文学研究科研究科長の開会の辞と、郁達夫の御令孫である郁偉氏による親族代表挨拶の後、基調講演のトップを飾ったのは、許子東氏の「郁達夫與日本」である。許氏の『郁達夫新論』（1984）は、それまで現実主義の作家とされていた郁をロマンチズムの作家として捉え直したものである。許氏の講演はテーマにとらわれない闊達な内容であったが、筆者にとっては、著書のベースとなった氏の修士論文についてのエピソードが最も印象的であった。氏の論文は、当時においてあまりの新しさゆえに審査が難航し、通らない可能性すらあったという。もしそうであったら、郁研究の状況は現在とは異なっていたかもしれない。メディアでも活躍する著名な文化人である許氏の講演とあって、会場は朝から椅子が足りなくなるほどの盛況であった。主催者による采配の妙といえよう。

大東和重氏の著書『郁達夫と大正文学』（2012）は、現在までの日本の郁研究における最も大きな成果の一つだと筆者は考えている。大東氏の手法は、郁の中に当時のまま冷凍保存されている大正期の文学状況を見出し、後に整った形で書き替えられた文学史ではない、生の状況



を掘り起こし再現するというものである。講演は著書を一般にも分かりやすく噛み砕いた内容で、豊富な写真資料や原文の引用と合わせ、郁と大正文学の関わりを全面的に紹介し、時間を感じさせない充実したものであった。

陳子善「郁達夫作品出版史的回顧」は郁作品の出版状況と関連エピソードを編年式で紹介した内容であった。陳氏は中国における実証研究の大家であり、『郁達夫研究資料』（上下、天津人民出版社、1982）や新時期以降最初の『郁達夫文集』（全12巻、花城出版社・香港三聯書店、1982～84）を編纂されるなど、中国国内の郁研究における基礎資料を整えられた。日本の同分野の泰斗・鈴木正夫氏と双璧をなす存在である。コメンテーターの大東氏は陳氏の業績を「大海撈針」と形容されたが、陳氏の講演はまさに海の底から針を拾うような作業の中で経験された、貴重な逸話に満ちていた。

高遠東「郁達夫小説中的批判資本主義問題」は、郁の小説から資本主義への批判意識を読み取り、その意味を文学史において考察したものである。郁文学の特徴や創作思想についての高氏の位置づけや評価は、中国では従来の視点・手法を踏まえた堅実なものであったが、今日改めて左翼作家として郁をとらえ直す試みは、近年の中国における社会主義的な視点の高まりによるものであろうか。

筆者は縁あって今回のシンポに参加し、「日本における郁達夫研究」のテーマで報告をさせていただいた。日本における郁小説の研究・翻訳状況を同時代から現在まで概観し、各時代の受容・研究の特徴と代表的成果を紹介し、現状を踏まえて今後の課題を展望した。

総合討論・質疑応答では中国出身の大学院生を中心に質問が出され、活発な議論が交わされた。

第二日の8月4日は、大東氏の司会により、「中国現代文学研究者の集い：郁達夫研究の現状と展望」と題し、中国側登壇者諸氏を囲む座談会が開催された。国内若手研究者を始め、出席者から自身の研究が紹介され、郁研究にとどまらない幅広い意見交換がなされた。関東、九州等からも研究者が駆けつけ、意見を述べてくださったのは大変な難いことであった。一方で、日本国内の郁研究者がわずかしか参加できなかったことは残念である。郁研究の現

状と展望を共有し、個別の研究の原動力となるような話し合いがもたれる機会が再びあることを望みたい。

### （三）記念セレモニーと「八高会」による普及活動

初日の午後最初に行われたセレモニー「郁達夫と服部担風友情の絵除幕式」、高文軍氏による「郁達夫名古屋での足跡紹介」、八高同窓会「八高会」からのビデオメッセージ紹介は、主に一般来場者向けに名古屋と郁のかかわりを紹介したもので、本シンポの大きな特色の一つである。名古屋における郁研究の資料収集と基盤づくりに力を注いでこられた高氏の情熱と労苦が垣間見える内容であった。八高在学中に郁が初めて撮った学生服姿の写真がスライドで映し出されると、会場からは懐旧、敬慕の念と興奮の入り混じったどよめきが起こり、郁が当地でいかに親しまれているかを肌で感じさせられた。郁の日本国内の訪問地を示した地図など、スライド資料が分かりやすく、学生と共に作成したというビデオは温かみのある丁寧な作りで、来場者の興味を惹きつけていた。

なお、郁の一般への普及において、八高会の貢献は多大である。名大東山キャンパスにある郁の記念碑は、会の尽力により1998年6月に建立された。当時、会の代表であった故・江崎公朗氏が、同校卒業生であった郁に注目し光を当てたことで、郁の名は地元浸透した。近年、中国を中心に国際シンポの数が急増する中、研究状況を広く一般に紹介し、知識と理解の普及に資するというシンポ本来の意義を考えると、今回のイベントは、小規模ながらその役割を果たすものであったといえる。これは郁が留学していた名古屋という地の利を十分に活かしてこそ得られたものであり、八高会の普及活動はその大きな一翼を担っていたといえよう。

一方で、八高会や服部担風氏の漢詩の会関係者は高齢化が進んでいる。今回の一般来場者の中には、九十歳を超える方も複数おられたという。日本における郁の普及状況は依然として危機的であることには変わりない。また、会場には中国出身の研究者や院生が多く、日本語での進行・通訳が必要ない場面も少なくなかった。日中間の研究交流が進むのは喜ばしい。だが報告者としては、何をもって「日本における」研究とすべきか、日本における研究の独自性について考えざるを得なかったのも正直なところである。

# 国内学会消息 (平成31年・令和元年)

## ●北海道大学中国哲学會 (旧=北海道中国哲学會、8月31日改名)

### 例会

1月17日

・閻若璩の八股文評論とその時代背景 金原 泰介

1月25日

・横井小楠の幕政改革論 田海 秀穂

2月21日

・卒業論文報告會 上林 千浩

4月26日

・雛の儀と『周禮』方相氏 和田 敬典

5月24日

・傳統、遷徙、變奏：康有為「宗教觀」的融通與開創  
(臺灣・國立中山大學) 楊 濟襄

6月28日

・宋翔鳳の微言説 吉田 勉

10月25日

・伊籙銘文新解釋 和田 敬典

11月29日

・擲錢法の由來と「重錢術」 木村 清順

### 第49回大會 8月31日

・『荀子』の性惡説と禮義起源論 西 信康

・奈良国立博物館青銅器調査報告 和田 敬典

・橋本左内の洋學觀について 田海 秀穂

・『論語』の分章と章旨をめぐる 弮 和順  
(和田 敬典 記)

## ●北海道大学中国語・中国文學談話會

### 第260回 4月27日

・清末における時間の表記に関する考察 金 博男

### 第261回 12月14日

・臺灣・高雄での留學生活 阿部 初音

### ○刊行物

『饕餮』第27號 (9月)

『火輪』第40號 (3月)

『連環畫研究』第8號 (3月)

(藤井 得弘 記)

## ●秋田中国学会

### 春季第168回例会 5月25日 於秋田大学教育文化学部

・原左氏伝からの春秋経・左氏伝の成立—中国文明の歴史観 吉永慎二郎

(東北中国学会第68回大会の公開講演を兼ねる)

### 秋季第169回例会 11月30日 於秋田大学教育文化学部

・東晋における北人と南人の関係 小林 孝洋

・江戸中期儒学界における中国の影響—山本北山を中心に— 鈴木長十郎

(羽田 朝子 記)

## ●東北中国学会

### 第68回大会 5月25日、26日 於秋田大学

#### 第一日

・鮮卑拓跋部の発祥地について 松下 憲一

・明清における亡妻哀悼散文の展開 野村 鮎子

#### [公開講演]

・原左氏伝からの春秋経・左氏伝の成立—中国文明の歴史観 吉永慎二郎

#### 第二日 (中国思想・中国文学研究分野のみ抜粋)

・「魯靈光殿賦」における彫刻描写の特殊性—先行辞賦の用例を辿って— 木村真理子

・『続高僧伝』感通篇・釈道英伝の諸問題 齋藤 智寛

・『竜図公案』評定本の版本系統について 堀川 慎吾

・清代初期における『四書大全』の受容について—陸隴其の取り組みを中心に— 尾崎順一郎

(齋藤 智寛 記)

●東北シナ学会（中国思想・中国文学分野のみ抜粋）

二月例会 2月13日

[卒業論文発表会]

- ・王充の死生観 藤本 隆司
- ・丁玲『霞村にいた時』論考 雪山 美希

[修士論文発表会]

- ・王船山政治思想研究—『読通鑑論』における制度論と異端批判について 宗 延聡

十月例会 10月10日 [新入生歓迎会・講演会]

- ・明儒鄒元標と無善無悪論 三浦 秀一  
(尾崎順一郎・菅原 尚樹 記)

●東北大学中国哲学読書会

第196回 2月18日

- ・近世中国社会における死の観念—祭文を中心に (武漢大学) 古 宏韜

第197回 8月7日

- ・帛書「黄帝四経」の道法思想 (東南大学) 路 高学

第198回 8月22日 [講演会]

- ・許謙《詩集伝名物鈔》的「興」論特点 (国立台湾大学) 史 甄陶

第199回 9月20日 [修士論文構想発表会]

- ・李贄と劉東星—性命探究の姿と『明燈道古録』 相原 貴次

第200回 9月30日 [卒業論文構想発表会]

- ・『法言』にみる揚雄の思想 小野 周平

第201回 11月13日 [卒業論文構想発表会]

- ・揚雄『法言』にみる学問観 小野 周平  
(尾崎順一郎 記)

●筑波中国学会

例会

7月18日

- ・傷ついた鳥のモチーフ—「傷禽」が示す鮑照の精神性 鶴尾 麻衣

8月1日

- ・劉禹錫における「竹枝詞」の意義 荒川 悠

11月21日

- ・鮑照の詩文における鳥の表象とその類型 鶴尾 麻衣

12月19日

- ・蒲松齡の社会思想—主に著作と塩政との関連において 倉持 怜

○刊行物

『筑波中国文化論叢』第38号（10月）

（稀代麻也子 記）

●中国化学会

大会 6月29日 於筑波大学

- ・諸稽轍次と新文化運動 (浙江大学) 周 妍
- ・台湾民主国総統唐景崧の思想—清国人意識と清国台湾統一思想— (元臺灣中華科技大学) 伊藤 幹彦
- ・謝国楨謄写本「双鑑楼主人補記莫氏知見伝本書目」初考 (浙江大学) 王 連旺
- ・盧照鄰「五非文」「釋疾文」考 加藤 文彬
- ・杜詩試論—夔州期における「比興」の意義—

・「侃按」から見た論語義疏の構造 高橋 均  
[シンポジウム]

- ・高等学校における漢文教育を考える—学習指導要領改訂を視野に入れながら—

（基調講演）首藤 久義

（パネリスト）渡辺 淳美・清水 庸・加藤 和江

（司会）増野 弘幸

例会 於大妻女子大学

3月9日

- ・六朝の擣衣について 北島 大悟

9月21日

- ・昭和初期における菊池惺堂の収蔵ネットワーク—大橋廉堂先生入蜀画会を中心として— 下田 章平

12月14日

- ・忘れ去られた鎮魂説話—劉敬叔「異苑」— 高橋 稔  
(内山 直樹 記)

●お茶の水女子大学中国文学会

大会 4月20日

- ・李白の詩について 和田 英信
- ・中国語選択疑問文の情報構造 伊藤さとみ

7月例会 7月6日

- ・曹丕と曹植—史実と作品をめぐって— 趙 美子
- ・老舍『黒白李』読解—キリスト教による社会改革論の挫折? 福島 俊子
- ・誠実な自白と精巧な嘘—沈從文の初期自叙体作品を中心に 黄 唯

9月例会 9月14日

- ・舜子変について—舜子説話の日中における変遷— 大西由美子
- ・詩人と妹たち 北宋・王安石詩を中心に 水津 有理
- ・童蒙教育書の系譜 泰田利栄子

12月例会 12月7日

- ・謝朓詩における空間意識 董 子華
- ・華人女性作家の自伝的作品における「華人性（チャイニーズネス）」について—徳齡、凌叔華を例として 阿部 沙織
- ・「偶然」から必然へ：翟永明と「白夜」—（知識人への）自由な公共空間提供の重要性— 但 継紅  
(竹野 洋子 記)

●六朝学術学会

第23回大会 6月15日 於二松學舎大學

- ・「魯靈光殿賦」における「猿」「狢」「熊」「胡人」「神仙」「玉女」等—先行する辞賦作品との違い— 木村真理子
- ・『幽明録』の世界—劉義慶の天命・因果観について 武 茜
- ・韻字の消長から見る南朝文学 李 翌宇
- ・王儉の礼学—穆妃の葬喪儀礼への対応を中心に 洲脇 武志
- ・六朝貴族制に関する一試論—『世説新語』を素材として— 福原 啓郎

- ・唐詩に見る六朝詩の受容—張九齡の「照鏡見白髮」詩を中心に 矢嶋美都子
- ・「拒まれた女」中国古代篇—杜伯の故事をめぐって 戸倉 英美

第38回研究例会 3月10日 於青山学院大学

- ・辛彦之の没年をめぐる一考察 池田 恭哉
- ・庾信と宋玉 典故・用語による賦の分析 中澤 仁
- ・徐陵の文学について 安藤 信廣

第39回研究例会 12月21日 於亜細亜大学

- ・六朝隋唐における禪讓中の即位儀礼について—即位場所・告代祭文を手がかりに— 柴 棟
- ・陶淵明の詩文における、自詠の姿について 大立智砂子
- ・『文選』以後の詩文と『万葉集』 安藤 信廣

○刊行物

『六朝学術学会報』第20集（3月）

(山崎 藍 記)

●日本杜甫学会

第3回大会 9月7日

於神戸研究学園都市大学共同利用施設UNITY

- ・杜甫と高適の制挙受験について 田中 京  
[講演]
- ・杜甫“大庇”思想對東亞建築民俗文化的巨大影響—以緝考韓國“上樑文”文獻為中心 沈 文凡
- ・杜甫と門閥意識 松原 朗

○刊行物

『杜甫研究年報』第2号（5月）

(紺野 達也 記)

●中唐文学会

大会 10月11日

於神戸研究学園都市大学共同利用施設UNITY

- ・霓裳羽衣曲の幻—唐・宋音楽をむすぶ架け橋としての白居易 中 純子
- ・漢の武帝と唐玄宗あるいは李白のことなど 乾 源俊



○刊行物

『中唐文学会報』第26号（10月）

（紺野 達也 記）

●日本宋代文学学会

第六回大会 5月18日 於金沢大学角間キャンパス

- ・欧陽脩詞の「詩化」について 張 亜琳
- ・宋詩における啄木鳥一寄託の深層化一 早川 太基
- ・微物之義一宋代談物文化中的譜録寫作一 麥 慧君
- ・南宋士人の交流と文学一『歳寒堂詩話』を手がかりに一  
白崎 藍
- ・蘇軾詩における「汝」 加納留美子
- ・陸游詩の自注について 甲斐 雄一
- ・史部文章入集の文体学考察一以宋代為中心一  
蔣 旅佳

第四回「唐宋八大家」シンポジウム

JSPS 基盤研究 (B)「唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究」主催 (司会) 東 英寿

- ・柳宗元作品裡的南來諸寶 張 蜀蕙
- ・王安石詩經學の朱熹詩經學に對する影響 種村 和史
- ・惠州期以降の蘇軾に於ける儒仏の交錯 陳 佑真  
(浅見 洋二 記)

●日本聞一多学会

「人・詩・學術一聞一多生誕120周年記念大会・国際學術討論会」8月3日 於二松學舎大學

[第一部報告]

- ・聞一多的海外書写与家国情懷 張 娟
- ・聞一多詩歌の文学史評価与読者基礎 余 薔薇
- ・《聞一多年譜長篇》(増訂版)拾遺与補正 呉 宝林
- ・從「原野」の劇本到「黒林子」の劇場 張 園
- ・紅燭与牛一聞一多、李公樸詩作比較 趙 忠和
- ・《詩經》与聞一多 吉井 涼子

[第二部報告]

- ・聞一多的“新格律”理論与詩歌創作 於 可訓
- ・經典化作為問題一回望聞一多的《現代詩抄》  
方 長安

- ・点、線、面：聞一多新詩的聽覺叙述藝術 楊 四平
- ・掙扎中的愛情一重讀聞一多的《紅豆》詩組 李 怡
- ・“新中国”的詩与“新世界”的詩一《当代中国詩選》与《現代詩抄》之比較 嚴 靖
- ・聞一多散文的比喻手法 加藤 阿幸

[第三部報告]

- ・近現代中国歴史中的聞一多 柳 建輝
- ・清華校史与檔案中的聞一多 范 宝龍
- ・西南聯合大学与聞一多 小林 基起
- ・聞一多与中共統一戰線 劉 宇
- ・聞一多《莊子》研究平議 王 攸欣
- ・聞一多在日本 鄧 捷

○刊行物

『神話と詩』第17号（3月）

（横打 理奈 記）

●日本漢詩文学会

<https://nihonkanshibun.jimdofree.com/>

第13回例会 3月2日 於共立女子大学

- ・オープニング演奏 (アルトサクソ) ジャン=ミシェル・ダマーズ 〈VACANCES〉 赤尾 苑美
- ・日本の赤化粧文化一若い女性の手法を中心に  
小野 友美
- ・振付家マリウス・プティパの美学とその功績一チャイコフスキー三大バレエを中心に 鈴木裕貴菜
- ・陶淵明作品における人称表現について 大立智砂子
- ・白居易の諷諭詩について一中唐士大夫官僚における選良意識の展開を通じて 土谷 彰男
- ・足利義満像の義持贊文について一毘婆尸仏偈の用例と義満の葬礼 萱場まゆみ

第14回例会 9月7日 於如水会館

- ・オープニング演奏 (弦楽合奏) チャイコフスキー「弦楽セレナーデ」より第二楽章 〈ワルツ〉  
〈アンサンブル 凜〉中野 綾子・斎藤 幸子・大塚 美雪・佐野翔太郎・横山 聡子・増田 光一
- ・良寛『草堂集貫華』研究一夜半の詩作を中心として  
川崎 美香

- ・李白「採蓮の曲」の複合的構想について 宇野 直人
- ・十七世紀の永曆朝廷と西洋との関わり—ローマ教皇に送った書簡 松野 敏之
- ・北辺を詠う—栗本鋤雲『唐太小詩』について 三上 英司

○刊行物

- ・『日本漢詩文学会会報』第6号(2月)・第7号(6月)
- ・『倉田定宣著作集』明德出版社(8月)  
(松野 敏之 記)

●日本詞曲學會

詞籍「提要」譯注検討會

9月7日、8日 於立命館大學文學部  
『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および検討  
『唐宋名家詞選』譯注検討會

3月16日、17日 於日本大學商學部  
龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討  
小風絮會 於立命館大學文學部

1月26日、2月23日、4月27日、5月26日、6月23日、  
7月20日、9月21日、11月23日、12月21日  
龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

○刊行物

『風絮』第16號(12月)  
(藤原 祐子 記)

●國學院大學中國學會

第216回例會 1月12日

- ・「太上」の語義とその変遷 呂 夢雨
- ・『伊勢物語』に影響を与えた『詩經』の一片—鄭風の場合— 谷本 玲大
- ・『孟子』における争論の特徴 長谷川清貴

第217回例會 10月26日

- ・『論語』「古諺」研究序説—説得様式と思想的価値— 柴崎 一孝
- ・詞社の形成と継承—咫村詞社に対する考察 李 雨晞
- ・和田静観窩『論語序説諺解』小考 青木 洋司

第62回大會 6月22日、23日

[公開講演]

- ・徳宗朝という時代 金子 修一
- [研究発表]

- ・コンピュータ上の漢文訓讀表記法に関する現状と課題 篠原 泰彦
- ・「孫卿賦」の特質について—「屈原賦」との関連を手掛かりに— 中山ひかり
- ・曹植「辭賦小道」について 鈴木 崇義
- ・蘇軾と寶月大師との交往—一尺牘を用いて 禹 程
- ・歴史社會言語學研究の視點から—石山福治『支那語の手紙』 河崎みゆき
- ・齋藤拙堂の文論について 呉 鴻春
- ・『おくのほそ道』序章と漢詩文—『奥細道菅菰抄』注をめぐって— 塚越 義幸

○研究会

- 唐代文学研究会(毎週火曜日)—唐詩を読む— 赤井 益久
- 宋代文学研究会(毎週木曜日)—『蘇軾全集校注』を読む— 石本 道明
- 中国現代文学研究会(毎週金曜日)—謝冰心作品を読む— 牧野 格子
- 中国礼俗文化研究会(毎週金曜日)—「三魂七魄」説の研究— 浅野 春二

○奨励賞表彰 3月20日

[修士論文]

- ・『韓詩外傳』の『詩經』解釈における一考察 河野 貴彦
  - ・『典論・論文』の創作時期および動機 趙 歆
- [卒業論文]

- ・陳染『私人生活』における色彩が象徴すること 三井 ゆり

○刊行物

『國學院大學中國學會報』第64輯  
『崑崙』223号~第225号  
(青木 洋司 記)

●国士舘大学漢学会

第54回大会並總會 12月21日

[中国訪問報告]

・貴州の旅—水各村を訪ねて— 鷺野 正明

[卒論発表]

・公案研究 安西 楓

・『山海経』研究 畠山 知佳

[研究発表]

・朱子の鬼神解釈—程子からの継承問題— 藤本りえみ

[特別講演]

・書と老荘思想—余白と「無」の思想— 内村 嘉秀

[第8回詩文朗読コンテスト]

・課題文：李白「将進酒」

(鷺野 正明 記)

●早稲田大学東洋哲学会

第36回大会 6月15日

・王弼の「道」と万物に関する理論について

伊藤 涼

・『守護国界章』における『法華論』釈義とその系譜

武本宗一郎

・『南方録』における「草庵」—わび茶人と四畳半座敷の変遷をめぐって—

櫻本 香織

・インド仏教論理学派における知の有形象性の論証—『プラマーナ・サムッチャヤ』第一章第十一偈の解釈

三代 舞

・「天神七代」をめぐる言説史・再勘—神話注釈の視座から—

原 克昭

[講演]

・確立期修験道の思想と儀礼—即伝『修験修要秘決集』を中心に

宮家 準

○刊行物

『東洋の思想と宗教』第36号(3月)

(櫻井 唯 記)

●早稲田大学中国文学会

第44回春季大会 6月22日

・現実と幻想の狭間に生きる人間—イーユン・リーとウィリアム・トレヴァーについて— 郭 済飛

・発音学習における音声フィードバックの試み

・才子佳人小説におけるイメージとしての地理—江南を中心に— 工藤 稀瑛 朱 焱

[講演会]

・多民族国家・中国の理解をめざして 金丸 良子

第44回秋季大会 12月7日

・「文」と風土性再考—オギュスタン・ベルクと『文心彫龍』を手がかりに 伊勢 康平

・女性漢詩人原采蘋の詩作における「舟」の表現をめぐって 柯 明

・森槐南と『新文詩』—森槐南の漢学の形成 中村 優花

[講演会]

・周作人と大杉栄—中国から見た関東大震災と日本 小川 利康

○刊行物

『中国文学研究』第45期(12月)

(柴崎公美子 記)

●慶應義塾中国文学会

第4回大会 7月13日 於日吉キャンパス

・中国における劉慈欣作品の受容—国語教育を例として— 崔 靖宜

・感情描写を利用した明末清初の白話小説批評—金聖嘆批評『水滸伝』の泣き描写を例に— 石川 就彦

・金聖歎本『水滸伝』が描く「眼中」の世界 佐高 春音

・朝隠と吏隠 山田 尚子

[講演]

・日本漢学史上の句題詩 佐藤 道生

・漢文と高校生／高校の古典教育について 加藤 正彦

・『文選集注』本劉伶「酒徳頌」について 金 文京

(関根 謙 記)

●名古屋大学中国哲学研究会

第96回研究会 9月30日

・『大唐陰陽書』の曆注について 李 錡

○刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第18号（5月）

（佐野 大介 記）

●京都大学中国文学会

第34回例会 7月20日 於京都大学文学研究科第3講義室

・爛柯説話「王質」の変容とその背景 伊藤 令子

・韓愈の天人観と先秦諸子の受容について 鈴木 達明

・漢字文化のハードとソフト 阿辻 哲次

○刊行物

『中国文学報』第92冊（4月）

（緑川 英樹 記）

●中國藝文研究會

合評會・研究會 3月24日 於立命館大學末川記念會館

・『苑詩類選』について 富 嘉吟・唐 鈺

・王鵬運《梁苑集》校讀及相關問題討論 詹 千慧

研究會 6月16日 於立命館大學學而館

・漢代『太平經』における天人關係 許 曉璐

・『列仙傳』と『神仙傳』の神仙・神人・真人・仙人

宮本 紗代

・古筆切の李善注本《文選》について 芳村 弘道

・高適の「酬裴員外以詩代書」詩について 今場 正美

・『高適集』版本について 田中 京

・立命館大學圖書館西園寺文庫所蔵の『詞綜』について

靳 春雨

・商家の娘から女儒へ—江戸後期女流漢詩人高橋玉蕉の

傳記研究— 詹 斐雯

合評會・研究會 10月27日 於立命館大學學而館

・銀雀山漢簡「將義」篇に見る將の要件 石井真美子

・浦川源吾の『支那歴代純文學選』について 萩原 正樹

○刊行物

『學林』第68號（5月）・第69號（11月）

（田中 京 記）

●東山之會

研究發表 於京都女子大學

2月16日

・杜牧の挫折 齋藤 茂

3月23日

・日本に残存する五代詩について—内閣文庫所蔵『廬山記』を中心に— 陳 錦清

4月20日

・杜甫詩における擬人法 高岡 遼

6月15日

・杜甫の詩における「誰與」と「與誰」について 大橋 賢一

7月20日

・李白家世再考 乾 源俊

9月21日

・《萬葉集》中「霞（かすみ）」的特徴與漢譯中的“霞（XIA）”—論和歌翻譯中詞義與歌境的關係— 劉 小俊

11月9日

・平安時代の省試詩における傳奇化について 孫 士超

12月14日 東山之會主催・財団法人橋本循記念會助成  
國際シンポジウム「賈島とその文学」

・基調講演 愛甲 弘志

・貞元時代の文壇格局與詩歌風尚 羅 時進

・格僻語新體拗—談賈島五言律詩的三大特點— 齊 文榜

・賈島與禪宗 周 裕鏞

・中晚唐詩的重新寫定 陳 尚君

『長江集』譯註（2月16日至月11月9日）

卷四「訪李甘原居」至「夏夜」

（愛甲 弘志 記）

●阪神中哲談話會

第404回例会 12月5日 於大阪府立大學

第一部「阪哲評書」（全体司會）佐々木 聡

・『先秦の機能語の史的発展』

著者：戸内 俊介／評者：村上 幸造



・『劉向本戦国策の文献学的研究』

著者：秋山陽一郎／評者：南部 英彦

・『張衡の天文学思想』

著者：高橋あやの／評者：多田 伊織

第二部「研究発表」

・鬼系の病因論から蟲系の病因論—日本における病因論の受容と変容 池内早紀子

・統一前夜の「天下國家」構想—『呂氏春秋』と『荀子』「公」概念の思想史的意義 佐藤 将之

第三部「記念講演」

・『論語』本立而道生と富本・日本 大形 徹  
(橋本 昭典 記)

●大阪大学中国学会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm>

懷徳堂文庫見学会（株式会社自然総研との共催）

2月12日 大阪大学総合図書館

・懷徳堂文庫の貴重資料 湯浅 邦弘

○刊行物

『中国研究集刊』第65号 [李号] (6月)

(湯浅 邦弘 記)

●懷徳堂研究会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kaitoku-s/index.html>

[国際学術交流]

3月27日～30日

中国人民大学（北京）で湯浅邦弘が「懷徳堂儒学」の集中講義を行った。

6月19日

台湾中央研究院で湯浅邦弘が特別講演「儒教空間—懷徳堂」を行った。

6月21日

台湾師範大学で湯浅邦弘が招待講演「明治時代日本人看到的「世界」—漢学者西村天囚世界環遊旅行—」を行った。

(湯浅 邦弘 記)

●中国出土文献研究会

<http://www.shutudo.org/>

第70回研究会 3月23日、24日 於大阪大学文学部

・敦煌文献「正月占城気法」の雲気占について 椋島 雅弘

・左契口再考—契口と劃痕— 竹田 健二

・水泉子漢簡『蒼頡篇』の句式形態—四言本から七言本へ— 福田 哲之

・清華簡（八）『八氣五味五祀五行之屬』釈読 竹田 健二

・上古漢語の声調における地域時代差—特に去声と入声の分類について 鳥羽加寿也

第71回研究会 7月27日、28日 於大阪大学文学部

・先秦期における鬼神への懐疑—戦国楚簡を手がかりとして— 菊池孝太郎

・清華簡『八氣五味五祀五行之属』の氣の思想 竹田 健二

・『墨子』「田野葆土」校勘研究 曹 方向

・敦煌医書『明堂五藏論』の基本的性質 六車 楓

・『趙簡子』（『清華大学蔵戦国竹簡』第七分冊所収）釈文 清水 洋子

・清華簡『邦家之政』と儒墨の思想 湯浅 邦弘

[国際学術交流]

9月2日

中国の吉林大学を訪問、古籍研究所における学術講座・座談会で研究発表を行った。通訳は白雨田。

・清華簡《邦家之政》与儒墨的思想 湯浅 邦弘

・北京大学蔵漢簡《蒼頡篇》的綴連復原 福田 哲之

・關於《八氣五味五祀五行之属》的氣概念 竹田 健二

・漢字記號化問題 鳥羽加寿也

・關於中国古代的鬼神觀念 菊池孝太郎

・関与『明堂五藏論』之中的俗字 六車 楓

9月27日、28日

立命館大学で開催された世界漢字学会第七屆年會に出席して研究発表を行った。

・清華簡『封許之命』研究 草野 友子

8月24日、25日

北京大学で開催された「従中古到近代：写本与跨文化研究国際学術研討会」に参加して研究発表を行った。

- ・関于敦煌文献《正月占城気法》的雲気占 梶島 雅弘  
(湯浅 邦弘 記)

●中国四国地区中国学会

第65回大会 5月25日 於広島県立大学

- ・病と巫—「鬼交」を中心に— 孫 瑾
- ・王績詩に見える「野」について—「野人」を中心に— 猪井 敏也
- ・宋代に生まれた小説集について—『青瑣高議』『雲齋広録』『緑窓新話』を中心に— 孟 夏
- ・朱子格物致知の根本的性格 溝本 章治
- ・『金瓶梅』張竹坡評における「冷熱」について—崇禎本評との比較を中心に— 安部 浩子
- ・『紅樓夢』花の研究史 森中 美樹
- ・雑誌『改造』現代支那号掲載の豊子愷の画について 木村 泰枝
- ・「古畑別業記」に見える萩八景誕生直前の萩 鎌田 出  
(小川 恒男 記)

●広島大学中国思想文化学研究室研究会

第205回研究会 2月14日

[卒業論文発表会]

- ・王充の鬼神論とその形成 山内 純季

[修士論文発表会]

- ・『荀子』思想における「聖人」 水 源
- ・中村正直の昌平黌時代の実学思想 森 泰平

第206回研究会 11月21日

[卒業論文中間発表会]

- ・阮籍の思想—『通老論』『達莊論』から— 藤田 奨己
- ・中山城山の思想について—『校正天文訓』を中心に— 矢野 愛子

第207回研究会 12月12日

[卒業論文テーマ発表会]

- ・王莽の禪讓は堯舜禪讓伝説を利用した易姓革命の原点と呼びうるか 千鶴 恵史
- ・『戦国策』の応用研究—三つの視点による対話分析— 高井 未来

○刊行物 (発行人 東洋古典學研究会)

『東洋古典學研究』第47集 (5月)・第48集 (10月)

(有馬 卓也 記)

●広島大学中国文学研究室研究会

第213回 1月28日

[修士論文最終発表]

- ・清莫友芝『唐写本説文解字木部箋異』訳注の意義 鶴原 勝
- ・『杜詩抄』の底本に関する問題 高橋 武

第214回 2月8日

[卒業論文最終発表]

- ・北宋「日本刀歌」考—日本刀の原材料と運んできた商人について— 松田 悠希
- ・『太平広記』に見られる「屍」像について—「屍」と人間の関係性を中心として— 清水 優一
- ・『笑府』における人物描写—医者について— 室上 大樹

第215回 5月16日

[中四国地区中国学会事前発表]

- ・宋代に生まれた小説集について—『青瑣高議』『雲齋広録』『緑窓新話』を中心に— 孟 夏

第216回 6月27日

[修士論文構想発表]

- ・六朝樂府の物語詩研究 曾 令之

[修士論文中間発表]

- ・「白蛇伝物語」における「白蛇と禪師との決闘」 大西 紀衣
- ・『聊齋志異』における商人像—「塩商」を中心として— 劉 易曼

第217回 7月25日

[修士論文最終発表会]

- ・謝朓の「詠牆北梔子」詩について 劉 雅婧
- ・「河間伝」の真偽について—その受容に関する考察を通して— 許 培俊
- ・『夷堅志』及び『新編分類夷堅志』と明代の善書 施 金暁

[卒業論文構想発表]

- ・李邕研究のまとめとその問題点について 福田 知紗
- ・『太平広記』再生説話の研究 森島 豊大
- ・『李卓吾先生批評三国志』における批評態度 西岡 大気
- ・近代日本における『聊齋志異』の受容—田中貢太郎の翻訳を中心として— 中野 泰峰
- ・魯迅『故事新編』研究—その成書経緯及び日本語訳をめぐって— 田中 峻也

第218回 11月28日

[卒業論文中間発表]

- ・李邕碑文の文学性—その碑文を中心として— 福田 知紗
- ・大槻一族と仙台藩の藩校養賢堂について 黒沢 悠馬
- ・「西瓜」からみる大正天皇の詠物詩表現 中田 彩香
- ・田中貢太郎研究—『剪灯新話』の翻訳— 中野 泰峰
- ・『故事新編』の創作手法について—「奔月」を中心に— 田中 峻也

第219回 12月19日

[修士論文中間発表]

- ・原采蘋「采蘋詩集」訳注 鄭 然
- ・清代の小説における塩商の形象 劉 易曼

○刊行物

『中国学研究論集』第37号

(川島 優子 記)

●中国中世文学会

令和元年度研究大会 10月26日

於広島大学東千田未来創生センター

- ・辞書にないことば 小川 恒男

- ・古詩創作に見る慶暦後期の梅堯臣詩 大井 さき
- ・張竹坡『金瓶梅』評における「冷熱」について—金聖嘆『水滸伝』評との比較を中心に— 阿部 浩子
- ・『紅樓夢』における「芙蓉」の日訳に関する研究—「林黛玉」の人物造形を中心に— 蔡 春暁

[講演]

- ・中古文献の抄撰—以類書、類伝、小説を中心

羅 寧

例会 6月13日 於広島大学文学研究科

- ・『白蛇伝』物語の多様性—「法海との決闘」の場面を中心に 大西 紀衣
- ・『聊齋志異』における商人のイメージについて—本事との比較を中心にして— 劉 易曼
- ・六朝樂府の物語詩研究 曾 令之

○刊行物

『中国中世文学研究』第72号

(川島 優子 記)

●山口中国学会

例会 7月13日 於山口大学人文学部

- ・苗族のハレ着(烏更)と日常着(烏貝)の製作、着用の実態—中国貴州省黔东南州雷山県西江村苗族女性の婚姻と衣装 楊 梅竹
- ・苗族地域社会におけるモノのトランスローカルな流通—中国貴州省黔东南州地域における櫛の事例から

郭 睿麒

- ・西郷隆盛の代表的漢詩二首—薩摩三大偉人の漢詩

松尾 善弘

大会 12月21日 於山口大学人文学部

- ・匈奴单于位継承の研究 梅田 裕太
- ・苗族社会における宗教的職能者の伝承形態からみる父系理念—中国貴州省黔东南州施洞鎮のゴウヒャンヒャンを事例に 曹 紅宇

(根ヶ山 徹 記)

●九州中国学会

第67回大会 5月11日、12日 於尚綱大学

- ・陸機の「晋書限斷論」と理想的君主像—「弔魏武帝文」を手がかりに 王 昊聡
- ・佐久間象山の『琴録』について—江戸時代における楽律受容の一例— 韓 淑婷
- ・中国語教科書における単母音と有気音・無気音の調音方法の問題点について 董 玉婷
- ・「せっかく」と“好不容易”“好容易”の対応・非対応関係 周 世超
- ・二次元的物体に用いる中国語類別詞「片」「張」「扇」「面」について 劉 羸
- ・趙秉文『道德真經集解』再考 山田 俊

【講演】

- ・二十四孝の歴史と東アジアへの伝播 金 文京

○刊行物

『九州中国学会報』第57巻（5月）

（山田 俊 記）

●九州大学中国文学会

第302回中国文藝座談会 2月2日

- ・中国の禁書について 吉村 尚樹
- ・中島敦と『西遊記』 阿部 椋平
- ・『聊齋志異』における怪奇の表現と読者の意識 山田ひかり
- ・「駢賦時代」の再検討 林 暁光

第303回中国文藝座談会 3月9日、10日

「国際學術研討会暨第8届周秦漢唐讀書會—中日周秦漢唐文學學術的再出發—」（代表＝林暁光）／「第3回唐宋八大家シンポジウム—唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究—」（代表＝東英寿）との共催

- ・近年來中國漢魏六朝文學研究の新進展 (中国社会科学院) 劉 躍進
- ・テキストの公と私 浅見 洋二
- ・柳宗元の「記」の評価について 紺野 達也
- ・新見宋代墓志與王安石生平行實研究

（華東師範大学）劉 成國

- ・早期中國經典研究的問題與可能 (中国人民大学) 徐 建委
- ・早期史志の編纂體例問題—以《漢書・五行志》爲引子 (北京大学) 程 蘇東
- ・揚雄《甘泉》《河東》二賦の郊祀功能與政治博弈—兼論其“三世不徙官”的政治命運 (中国社会科学院) 孫 少華
- ・北魏洛陽城の変遷 田中 一輝
- ・義熙年間劉裕北伐の天命與文學—以傅亮《爲宋公修張良廟教》《爲宋公修楚元王墓教》爲中心 (南京大学) 童 嶺
- ・日藏舊鈔卷子辨偽方法略論 陳 翀
- ・時代性格、文本幻象、概念清洗—中世文學研究的三個突破口 林 暁光
- ・中日辭賦研究情況の差異—以二十一世紀以後爲中心 栗山 雅央
- ・漢魏六朝賦論發凡 (復旦大学) 羅 劍波
- ・文学批評研究資料としての『藝文類聚』について 大瀨 貴之
- ・軍書、史料、文章—閱讀方式對檄文的收錄、命題、體式的影響 (華東師範大学) 徐 儷成
- ・浅析《蘭亭記》の文體類型 成田健太郎
- ・鮑照到底有多“危險”？—論鮑照詩賦各文體間創作的不同取向 (復旦大学) 陳 特
- ・陸機詩文裏的曹操—論東漢至西晉的“英雄” 王 昊聡

第304回中国文藝座談会 4月27日

- ・西晋における曹操 王 昊聡
- ・班氏父子の賦作について 栗山 雅央
- ・偃武修文—目加田誠の元草案について 静永 健

第305回中国文藝座談会 7月13日

- ・明代の笑話と馮夢龍 山口 綾子
- ・『封神演義』『残唐五代史演義伝』の周之標序について 岩崎華奈子

第306回中国文藝座談会 9月28日

- ・陸機が見た曹操の「遺令」について 王 昊聡



- |                     |       |                                |           |
|---------------------|-------|--------------------------------|-----------|
| ・吉州本『近体楽府』考         | 東 英寿  | ・蘇軾奏議文研究                       | 武 建雄      |
| ・『重校北西廂記』版本系統について   | 黄 冬柏  | ○刊行物                           |           |
| 第307回中国文藝座談会 11月16日 |       | 『目加田誠「北平日記」—1930年代北京の学術交流』(6月) |           |
| ・『玄奘三蔵渡天由来縁起』考      | 雨宮 希望 | 『中国文学論集』第48号(12月)              |           |
| ・『世説新語』と皇帝権力        | 古野亜莉沙 |                                | (井口 千雪 記) |

## 委員会報告

### 【論文審査委員会】

委員長 渡邊 義浩

#### ○学会報第72集応募論文の審査の経緯

2020年1月15日(消印有効)締め切りの応募論文は全24篇(哲学・思想部門6篇、文学・語学部門13篇、日本漢学部門5篇)であった。1月25日に論文審査委員会を開催し、論文1篇につき3名の査読委員(論文審査委員会委員1名を含む)を決めた。

3月21日開催の論文審査委員会で、査読委員3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門2篇、文学・語学部門7篇、日本漢学部門3篇の計12篇の掲載を決めた。

今回、枚数超過と認められた論文は皆無であった。来年少も引き続き、「執筆要領」の遵守にご注意いただければ幸いである。

投稿論文は、本来16篇の掲載が可能である。ところが、昨年は10篇、今回は12篇しか採用できなかったことはきわめて残念であった。来年は、さらに多くの会員の積極的な投稿を期待したいと思う。

#### ○その他、3月21日の論文審査委員会での審議決定事項

- ・学会報第72集依頼論文執筆候補者(評議員2名、一般会員2名)を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・哲学・思想部門から2名、文学・語学部門から1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。



# 日本中国学会評議員選挙(本年6月郵送)投票のお願い

選挙管理委員会委員長 松原 朗

本年度は、日本中国学会の評議員の改選年に当たる。評議員会は「理事会の提案に対する最高議決機関とする」(評議員会・理事会・幹事会規約)とあるように、日本中国学会の最高の議決機関である。

今あらためて会員諸氏に積極的に評議員選挙に臨んでいただきたいと希望することには理由がある。

第一に、投票総数を増やすことが大事である。評議員選挙に関心を持つことは、学会のあり方に関心を持つことと同じである。日本における中国学の置かれた環境に好転の兆しが見えないなかで、一体、学会に何ができるか、学会には何を期待してよいのかを真剣に考えるべき時期にさしかかっている。

過去十年の「学会便り」に載せられた理事長たちの巻頭言を読み返してみた。理事長たちはもちろん学会の将来を悲観していない。しかし言葉の底から響いてくるのは、あたかも「毎に昔人感を興すの由を覽るに、一契を合せたるが若し」という具合で、人文学の置かれた苦境と、とりわけ私たちの中国学の置かれた苦境についての切実な認識である。

学会の役割には限界があることは、言うまでもない。プロジェクト型の共同研究がどれほど盛んになっても、結局は、個人の地道な研究と、その上に築かれる独創的な視点が最も肝要である。その個人の研究をどれだけサポートできるかが、学会の大きな課題となるだろう。

第二に、少し具体的なことになるが、現行の評議員選挙規定の精神を振り返る必要がある。

1955年(昭和30)から2000年(平成12)年まで、全国を7地区(研究機関の所在地)に分け、計42名の評議員の定員を北海道地区に2名、以下東北に3名、関東に15名、中部に4名、近畿に9名、中国四国に5名、九州に4名を配分して、各地区の会員は、当該地区の評議員を選挙するという仕組みが行われた。また女性枠は設定されておらず、初めての女性評議員は1999年に誕生した。

2001年に新規定が導入された。従来の地区枠が廃止されて全国1区(定員50名)となり、自分の属する地区以外にも投票できるようになった。ただ地域の偏りを緩和するために、各地区に少なくとも2名以上とし、これに満たないときは繰上げて当選とした。また女性枠の5名も、同様に設置した。この改革の精神は、理解しやすい。地区縦割りで、地区の会員はその地区の代表を選ぶ。これでは地域性を養うことはできても、学術の開かれた交流を促進するには不適当である。ここで地域の声を届ける代表として地区枠2名が設けられたことは、苦肉の策だった。

4年後の2005年(平成17)に、現行規定が導入される。全国1区(定員60名)となり、地区枠は3名。また女性枠は12名に拡大された。女性枠は、当初は女性評議員を確保するためのものだったが、現在は13名で、すでに制度的誘導を借りずとも女性が増加している。これが当然のあるべき姿である。

一方、問題を解決できないでいるのが地区枠3名であり、いくつかの地区では単純な得票数でその枠を埋めることが難しく、繰上げ当選を考えなければならない事態が起りつつある。地域の声を届ける代表として地区枠が設定されたことの意義を、会員諸氏はいま一度憶い出すべき時期にある。何事につけ、一極集中には弊害が伴う。効率だけを考えればその選択肢があり得たとしても、はたして学術にそれが当てはまるかどうか。ましてや分厚い伝統をもつ私たちの中国学では、目先の効率をいわずらに追い求める必要性がそもそもない。それぞれの地域に特色のある研究が存在し、相互に刺戟し合う状態こそが真に中国学を活性化させる途であるようにも思われる。日本中国学会の活動意義が問われる中で、今回の評議員選挙では、会員諸氏には学会の将来とご自身の研究の発展を見すえて積極的な投票をお願いしたい。

# 事務局より

## ◎評議員の一部交代について

2020年3月31日に評議員3名が評議員定年を迎え、また1名が退会したため、下記のように2018年に実施された評議員選挙の結果に基づき4名の会員が繰り上げ当選となりました(任期は2020年4月1日から2021年3月31日まで)。

- ・退任の評議員 (定年による)  
植木 久行会員・土田健次郎会員・富永 一登会員
- ・退任の評議員 (退会による)  
平田 昌司会員
- ・後任の評議員  
小路口 聡会員・松村 茂樹会員・三上 英司会員・山口 守会員

## ◎事務局幹事の交代について

- ・退任の幹事 須山 哲治会員
- ・後任の幹事 松倉 梨恵会員

## ◎住所等の変更と会員名簿への掲載について

住所や所属機関の変更につきましては、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。電子メール、郵便、ファックス、あるいは会費納入時の振込用紙(ゆうちょ銀行払込取扱票)通信欄をご利用ください。

今年度10月発行の会員名簿には、8月末日までにお知らせいただいた会員情報を掲載いたします。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。なお、以前は固定電話の番号(自宅または勤務先)のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話の番号も掲載できることといたしました。携帯番号を掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います(ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を掲載することはありません)。

## ◎クレジットカードによる会費決済について

2017年度より、海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を開始しています。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページのURLをお送りいたします。なお、利用可能ブランドはVISA・MASTERのみです。ご了承ください。

## 日本中国学会事務局

電子メール: info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵便: 〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25  
斯文会館内

ファックス: 03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号: 00160-9-89927

加入者名: 日本中国学会



## 訃報

前号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。(敬称略)

木村 直子(近畿)	2019年1月18日
佐藤 一郎(関東)	2020年2月8日
中野 達(関東)	2019年11月3日

## 第72回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位：

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第72回大会は慶應義塾大学が準備を担当し、本年10月10日（土）、11日（日）の両日、慶應義塾大学日吉キャンパスにて開催することとなりました。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2020年4月吉日

日本中国学会第72回大会準備会代表

高橋 智

記

1. 部 会 : 一、哲学・思想  
二、文学・語学  
三、日本漢文（日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など）  
四、パネルディスカッション（次世代シンポジウム）
2. 時 間 : 一～三は発表20分に質疑応答10分、四は報告、質疑応答を含め全体で120分以内。
3. 締 切 : 2020年6月27日（土）（当日消印有効。簡易書留、レターパック、EMS等追跡調査が可能な郵送手段をお願いします）
4. 応募方法 : 研究発表は、学術研究の最新の成果で、未発表かつ未公開のものに限ります。  
一～三に応募される方は、氏名（フリガナ・所属研究機関および職位）・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要（800字以内、日本語による）を、大会準備会まで郵送すると同時に、それらの Word ファイル（.doc または .docx 形式）を E-mail（ファイル添付）により期日までに送付してください。E-mail 受信時には自動返信します。期日（日本時間）までに電子ファイルが届いていない場合、応募は受理できませんのでご注意ください。なお、中止となった第71回大会で発表予定となっていた方については、同じテーマで発表を希望する場合、優先的に採択することを検討します。  
四に応募される場合は、パネルの代表者がパネリスト全員の氏名（フリガナ、所属、メールアドレスも明記のこと）、パネルの題目と概要（1,200字以内、日本語による）を、上記と同様の方法により、大会準備会宛て送付してください。なお、学会、研究会あるいは研究機関（研究室等）によって組織されたパネルも可とします。  
※執筆者による校正はないため、完全原稿をお願いします。
5. 応募資格 : 研究発表の応募には、本学会会員資格が必要です。特に四については、パネリスト全員の本学会会員資格が必要となります。新入会員の方は、応募申し込み締切日までに会費の振り込みが必要となりますのでご注意ください。
6. 応募宛先 : 〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1  
問合わせ先 慶應義塾大学来往舎種村和史研究室（日本中国学会第72回大会準備会事務局）  
E-mail: japansinology72@keiochina.jp

◎本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学 三、日本漢文、四、パネルディスカッションの四部会を予定しておりますが、応募状況により調整することも考えております。各部会の発表は、質疑応答も含めて日本語でお願いします。なお、バランスも勘案して審査を行ない、やむを得ずご発表をお断りすることもありますのでご了承ください。

◎パネルディスカッションに年齢制限はありませんが、次世代を担う若手研究者からの応募を歓迎します。またパネルの内容は、学会ホームページに「研究集録」として掲載される予定です。